

面接力なくして面接術なし！

(面接力は「生きる力」です。)

さあ、最高の自己紹介と自己紹介的志望動機を150字～200字(30秒～40秒)で完成させました。前号で書き漏らしましたが、この175字前後の構成は「結論(一言)⇒理由(一言)⇒具体的体験の裏付け」です。

これを正しいタイミングで答えるのが面接術ですが、「タイミング?そんなの聞かれたときに答えるだけでしょ」と不思議に思われる方がほとんどでしょうか。確かに聞かれたら答えるんですが、予め知っておかないと、聞かれていることに気づけない。したがって、答えない。答えないまま、次の質問に行かれてしまう。こういうことになりかねません。こういう馬鹿げたことにならないために、予め知っておくべきことをこれから書きます。

面接における質問を、「自己紹介」「志望動機」「その他」に大別します。内容が問われるのは、前二者であり、「その他」は内容ではなく、「人物」を見ている。したがって、その他の質問をたくさん設定して、いちいち答を用意しても「労多くして…」ということです。何を聞かれても、思ったとおりに答えてくれれば結構です。(意味不明の質問は、あなたの困り方を見ているわけで、「困ったらマイナス」などということはありません。まあ、そんな質問は、大学生になってからの就職活動まで心配する必要はないと思いますが。)

さて、いよいよ本題です。≪「自己紹介」「志望動機」を言いそびれるな≫についてです。

まずは、自己紹介から。「あなたのセールスポイントはどこですか」と聞かれたら自己紹介してください。予め完成させた自己紹介ネタでセールスポイントを語ってください。「そんなの当然」と思っている方が多い一方で、「自己紹介」と「自己PR」で答を変える人も少なからずいます。「自己紹介=自己PR」と考えるのが正しい理解です。

あなたの高校生活についての質問がされます。「高校時代に一番打ち込んだことは何ですか」「高校時代に得たことは…」「一番感動したことは」「一番嬉しかったことは」、これらが来たら、答え方はそれぞれの質問に合わせなければなりません。内容としては自己紹介ネタで答えてください。

「友達の中であなたの役割は」「友達はあなたをどういう人間だと言いますか」「これだけは人に負けないというものは何ですか」これらも同様です。答え方を質問に合わせて、自己紹介ネタを出し惜しみせず使ってください。

例示した質問はすべて自己紹介を求めています。自己紹介系の質問にしっかりと答えられれば、突っ込まれこそすれ、自己紹介系の第二問が来ることはありません。自己紹介系の質問に対して、自己紹介したにもかかわらず、もう一問、自己紹介系の質問が来たとすれば、それは面接員の見識の低さを物語っており、自信を持って、「先ほどの質問と同様の答になりますが」と断って、もう一回、自己紹介してください。さすれば面接員は自らの不明を恥じ、あなたの答に納得することでしょう。

次に志望動機です。志望動機は、「これから何をしたいか」です。ですから、「本学を選んだ理由をおっしゃってください」と聞かれたら、志望動機ネタを使うべきです。やりたいことを言い切って、だから貴学を選んだ。「やりたいこと」と「貴学」の因果関係が希薄でも、「やりたいこと」に説得力があればOKです。大学を褒めちぎって面接点が上がるのであれば、よほど低レベルの大学と言わざるを得ず、そんな大学の存在を考慮する必要はありません。「入学後の抱負は何ですか」「今あなたの一番の関心事は何ですか」と来たら、志望動機ネタを使ってください。そのことを知らないと、笑顔で、サークル活動への興味などを語ってしまいます。サークル活動そのものについての質問は、その他質問（答え方質問）ですから自由にお答えください。しかし、志望動機系質問を外して、意味のない答をしないようにしてください。

自己紹介、志望動機、以上のことを予め知っておかないと「自己紹介ネタの出し惜しみをして言わずに終わる」「志望動機ネタの出し惜しみをして言わずに終わる」という最悪の結果に陥るわけです。最高のネタですから出し惜しみしない。すぐ使う。これが「面接のコツ」「面接術」です。しかし、この面接術は、「面接力」がなければ使いようのない技術です。そして、この面接力は、面接試験のない人にとっても必要な「生きる力」なわけです。

最後に、「自己PR書」的文書の提出が義務付けられている場合について注意しておきます。これらについては、「面接の際の参考資料であり、点数化するものではありません。」という説明がされているはずですが、勘違いしないでください。点数化はされませんが、「自己PR書」の出来は合否に直結しています。良い出来の「自己PR書」ならば、面接は、自己PR書に即して行われます。つまり、あなたの書いた台本どおりに突っ込んでもらえる面接が進むということです。逆に、読みづらく、内容のない自己PR書は無視されます。良い自己PR書が書けるか否か。これは、面接術ではなく面接力です。面接力がなければ、書けません。

面接力は「生きる力」です。

.....

タネ本があります。「面接の達人」です。1992年（平成4年）、18歳人口がピークになりました。2021年は、その方々が47歳になる年です。保護者の皆様に多い年齢層です。当時は、大学の定員が不足、大学は「狭き門」となりました。トップ校は別として、2番手の進学校は指定校推薦に走りました。その当時から「第一志望貫徹！」をやっていた私のクラスは、指定校にほとんどエントリーせず、第一志望校の公募制にチャレンジしました。そのとき、私が研究したのが、「面接の達人」。結果、私のクラスの公募制合格率は86%でした。当時としては驚異的な数字です。「面接の達人」は内容をリニューアルしながら、今も出版されています。